

ELECTRIC HYDRAULIC VALVE

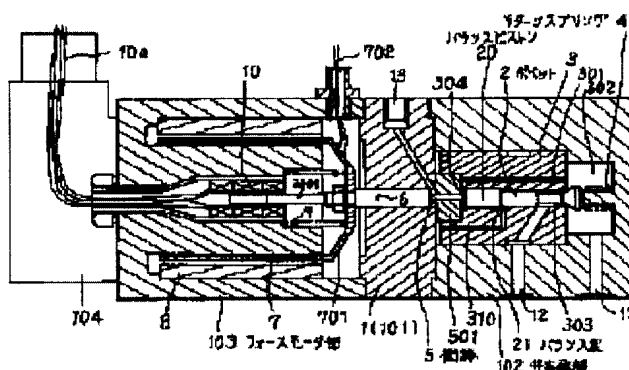
Patent number: JP8093951
Publication date: 1996-04-12
Inventor: KUSUSE TADASHI; KUNIMOTO ETSUO; ARAI NORIYASU; SHIROKIBARA TAMIYA
Applicant: MITSUBISHI HEAVY IND LTD
Classification:
 - international: **F15B13/044; F16K31/06; F15B13/00; F16K31/06;**
 (IPC1-7): F16K31/06; F15B13/044
 - european:
Application number: JP19940232995 19940928
Priority number(s): JP19940232995 19940928

[Report a data error here](#)

Abstract of JP8093951

PURPOSE: To provide an electric hydraulic valve for hydraulic driving actuator control which is operable with a small capacity hydraulic power source and can ensure the control precision equal to a spool type valve.

CONSTITUTION: A poppet valve 2 for mutually connecting and disconnecting oil holes 11, 12 is pressed to a seat by a return spring 4. A balance piston 20 is provided between a rod 5 for transmitting the electromagnetic force of a force motor part 103 to open the poppet valve 2 and the poppet valve 2, and a balance chamber 21 situated on the poppet valve 2-side end of the balance piston 20 is connected to a tank drain. On the other hand, a hydraulic chamber 304 situated on the rod 5-side end of the balance piston 20 is connected to a hydraulic chamber 302 situated in the valve opening direction of the poppet valve 2 through a communicating passage 301. The piston area A_N of the balance piston, the area A_2 of the poppet valve 2, and the area A_3 of the rod 5 are set to have the relation of $A_1 = A_2 + A_3$, so that no hydraulic force is loaded to the force motor 103, and the poppet valve 2 can be thus precisely controlled by the electromagnetic force of the force motor.



Data supplied from the **esp@cenet** database - Worldwide

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平8-93951

(43)公開日 平成8年(1996)4月12日

(51)Int.Cl. ⁸	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
F 1 6 K 31/06	3 0 5 J	0380-3K		
	C	0380-3K		
F 1 5 B 13/044	C			

審査請求 未請求 請求項の数1 O L (全5頁)

(21)出願番号 特願平6-232995

(22)出願日 平成6年(1994)9月28日

(71)出願人 000006208

三菱重工業株式会社

東京都千代田区丸の内二丁目5番1号

(72)発明者 楠瀬 正

長崎市深堀町5丁目717番1号 三菱重工業株式会社長崎研究所内

(72)発明者 國本 悦夫

長崎市深堀町5丁目717番1号 三菱重工業株式会社長崎研究所内

(72)発明者 新井 徳泰

広島県三原市糸崎町5007番地 三菱重工業株式会社三原製作所内

(74)代理人 弁理士 坂間 暁 (外1名)

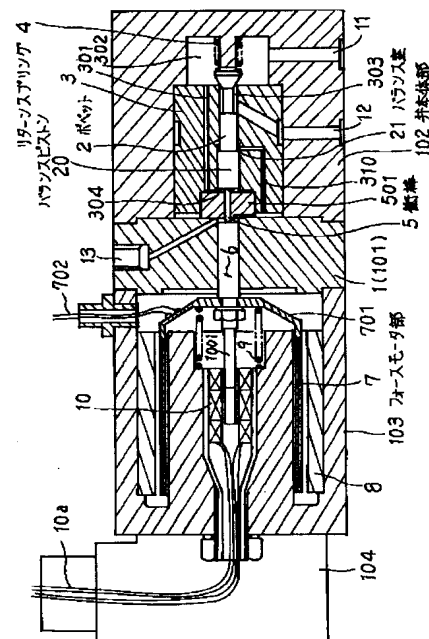
最終頁に続く

(54)【発明の名称】 電気油圧弁

(57)【要約】

【目的】 小容量の油圧源により作動可能で、スプール型式の弁と同等の制御精度を確保できる油圧駆動アクチュエータ制御用の電気油圧弁を提供する。

【構成】 油穴11、12の間を開閉するボペット弁2がリターンズプリング4でシートに押圧されている。このボペット弁2を開くようフォースモータ部103の電磁力をボペット弁2に伝える衝棒5とボペット弁2の間にバランスピストン20があり、このバランスピストン20のボペット弁2側の端にあるバランス室21はタンクドレンにつながれている。一方、バランスピストン20の衝棒5側の端にある油圧室304はボペット弁2の弁開方向にある油圧室302と連絡通路301で連絡されている。バランスピストンのピストン面積A1とボペット弁の面積A2と衝棒5の面積A3は $A1 = A2 + A3$ の関係にありフォースモータ103には油圧力が負荷されないようになっていて、ボペット弁2はフォースモータの電磁力により精度良く制御可能である。



1

【特許請求の範囲】

【請求項1】 リターンズpringによって閉方向に押圧されたボベツト弁を有し、同ボベツト弁を電磁力により変位させて油路間の連通を制御することにより油圧駆動アクチュエータの作動をコントロールする電氣油圧弁において、前記ボベツト弁は衝棒とバランスピストンをこの順に介して前記電磁力により変位され、前記バランスピストンの前記ボベツト弁側の一端はタンクドレンにつながり、前記バランスピストンの前記衝棒側の他端は前記ボベツト弁の弁開方向の室と連絡されているとともに同バランスピストンの面積は前記ボベツト弁と前記衝棒の面積の和になっており、かつ、前記ボベツト弁の変位を測る変位計を有することを特徴とする電氣油圧弁。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は油圧シリンダ等の油圧駆動アクチュエータの作動をコントロールする電氣油圧弁に関する。

【0002】

【従来の技術】 油圧シリンダ等の油圧駆動アクチュエータの作動をコントロールする電氣油圧サーボ弁あるいは比例制御弁は従来周知であるが、これらの油圧を切り替える弁部はスプールタイプであった。これらの弁ではパイロット段のノズルフラップで電流入力から変換された油圧あるいはソレノイド又はフォースモータにより直接スプールの駆動し弁作用をさせる。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】 図3には、従来のノズルフラップ式サーボ弁を示しているが、このサーボ弁ではパイロット段にあるノズルで作動油が常時消費されるため、それだけ油圧源の容量を大きくする必要がある。さらにスプールでは油密が狭い隙間によるため若干の油もれが発生する。

【0004】 このため極端に油圧源が制限される状態の下で使用される場合、例えば停電時に油圧ポンプが停止した後もアキュムレータ内の油圧で作動を続けるような装置の場合はアキュムレータ容量が大きくなり、スペース、重量上の不具合がある。

【0005】 本発明はボベツト弁を使用し、小容量の油圧源により作動可能で、スプール型式の弁と同等の制御精度を確保でき、圧力による駆動電磁力への負荷力の変化を無くした油圧駆動アクチュエータ制御用の電氣油圧弁を提供することを課題としている。

【0006】

【課題を解決するための手段】 本発明は、リターンズpringによって閉方向に押圧されたボベツト弁を有し、同ボベツト弁を電磁力により変位させて油路間の連通を制御することにより油圧駆動アクチュエータの作動をコントロールする電氣油圧弁における前記課題を解決するため次の構成をもつ電氣油圧弁を提供する。

2

【0007】 すなわち、本発明による電氣油圧弁では、ボベツト弁は衝棒とバランスピストンをこの順に介して電磁力により変位され、バランスピストンのボベツト弁側の一端はタンクドレンにつながり、バランスピストンの衝棒側の他端はボベツト弁の弁開方向の室と連絡されているとともにバランスピストンの面積がボベツト弁と衝棒の面積の和になっており、かつ、ボベツト弁の変位を測る変位計を備えた構成を採用する。

【0008】 本発明による電氣油圧弁でボベツト弁を変位させる電磁力としては、コイルに電流を流すことによりコイルの軸方向に力が発生するようにしてその電流の強弱により発生する力を変化させるようにしたフォースモータを使用するのが好ましい。

【0009】

【作用】 本発明による電氣油圧弁では、ボベツト弁と同軸上にバランスピストンを配置し、ボベツト弁を変位させる電磁力を衝棒とバランスピストンを介してボベツト弁に伝え、かつ、バランスピストンの面積をボベツト弁と衝棒の面積の和になるように構成して油圧力が打ち消され、電磁力に対してはボベツト弁のリターンズpring力しか対向しないのでボベツト弁は電磁力によって精度良く、かつ、高速で動かすことが可能となる。

【0010】 これにより本発明の電氣油圧弁では弁開口面積したがって流量の連続的な制御が可能となり、しかも漏れが極小でスプール弁並に負荷圧の影響の無いバルブが達成できる。

【0011】

【実施例】 以下、本発明による電氣油圧弁を図1に示した一実施例により具体的に説明する。図1において、弁本体部102と、電磁力を発生するフォースモータ部103は中間ピース部101を介して連結されている。104は電線のコネクタ部である。

【0012】 2はボベツト、20はバランスピストン、3はボベツトハウジング、301はボベツト2の外側の油圧室302とボベツト2の背面の油圧室304を結ぶようボベツトハウジング3内に形成された連絡通路である。303はボベツト2の内側の油圧室、4はボベツト2のリターンズpring、21はボベツト2とバランスピストン20で形成されるバランス室であり、タンクドレンに連絡されている。

【0013】 このようにバランスピストン20のボベツト2側の端はタンクドレンに連絡され、バランスピストン20の他端はボベツト2の弁開方向の油圧室302と連絡されている。ボベツト2とバランスピストン20はボベツトハウジング3に摺動可能に挿入され、ボベツト2の頭部でその着座時には油密が保持される。

【0014】 5は衝棒で先端がバランスピストン20の背面に当接される。501は衝棒案内で、衝棒5が油密かつ摺動可能にはまっている。衝棒案内501は弁本体部102と中間ピース部101間に配設されている。6

は後述のコイルコア701の支持案内内部、7はそのコイルコア701に巻かれたコイル、701はコイルコア、702は通電線、8は磁石、9はばねでコイルコア701を右方に押すようになっている。10は差動変圧器のコイル、10aは検出電線、1001は差動変圧器のコアでコイルコア支持案内内部6に延長して取り付けられている。

【0015】11は油穴で油圧室302につながる。12も油穴で油圧室303につながる。13はドレン穴で衝棒案内501とコイルコア支持案内内部6間につながっていて、衝棒5と衝棒案内501の間を通過して油圧室304から漏れてくる油、及びバランスピストン20とポペット2からバランス室21へ漏れて来る油を外部に排出できる。ここでバランスピストン20のピストン面積A1はポペット2の面積A2と衝棒5の面積A3の和となっている。

【0016】図1に示した電気油圧弁は以上説明した構成を有しておりその作動は次のとおりである。図1において本体フォースモータ部103は磁性材料であるため、磁石8によりコイル7を横断する磁束が発生する。

【0017】そこでコイル7に電流を流すとコイル7の軸方向に力が発生するが、電流を右方向に力が発生する方向に流すとこの力はコイルコア支持案内内部6、衝棒5、バランスピストン20を介してポペット2に伝達される。この力がリターンズプリング4の力に打ち勝つとポペット2はリフトし、油圧室302と303が、したがって油穴11と12がつながり弁作用が行われる。

【0018】この時、電流の強弱によりコイル7に発生する力は変化するので、弁開度をコイル7に流す電流値により変化できるが、実際の弁開度、すなわち弁変位は、差動変圧器コイル10により検出されるので、適宜のコントローラで弁開度の指令値と実際の弁開度を比較してその偏差の大小により電流を強弱させ弁変位を指令値に追従させる。つまり本弁は弁変位すなわち流量を連続的に制御できる比例制御弁として作動する。

【0019】ポペット2の弁作用において、バランスピストン20のピストン面積A1、ポペット2の面積A2、及び衝棒5の面積A3の関係は前記したように $A1 = A2 + A3$ の関係が成り立ち、バランス室21はドレン圧でほぼ零なのでフォースモータに対し油圧力は働かず、フォースモータの負荷はリターンズプリング4のみとなり、油圧室303、302の圧力の大小の影響を受けない。このため、コイル7の力でポペット2を精度良くかつ高速に動かすことが可能となる。

【0020】本弁はポペット形式であるため、閉弁時は油圧室302と303間の漏れが殆ど無い。また、衝棒5からドレン穴13及びポペット2、バランスピストン20の摺動部を伝わってバランス室21への油の漏れは存在するが、隙間が小さく摺動長さが長いので漏れは極

小である。

【0021】ところで、ドレン穴13は衝棒5からの漏れを外部に導くため作動油はコイル7に行かない。従って、作動油の代りに水を作動液とする場合でもコイル7の絶縁不良等の不具合は発生しない。なお、本体フォースモータ部103の内部に粘度の高い油を入れておくとコイル7の制振に効果がある。以上のように本弁は漏れない比例制御弁として作動する。

【0022】図2は本実施例による電気油圧弁を使った油圧サーボシリンダのシステム図で、1と1'が図1の弁、10、10'は図1の弁の作動変圧器コイルである。Aは油圧シリンダでばねリターン式、Bは変位計で油圧シリンダAの位置を計測できる。Cは周知のサーボコントローラで、第1の作用として指令値と変位計Bで計測された実際のシリンダロッドの位置を比較して弁1または弁1'を便宜開閉する電流指令をおくる。

【0023】コントローラCの第2の作用として、前述の弁開閉指令に対して、実際のポペット変位を差動変圧器コイル10、10'で検出し指令と比較し、その偏差に応じて電流を変化させる。以上の作用によって前述のように本弁を比例弁として作動させる。

【0024】このように本発明になる弁2個を用いると、図2に示すように、本弁を比例制御弁として作動させ、これにより油圧シリンダを任意にかつ漏れが少なく駆動させることができる。

【0025】

【発明の効果】本発明による電気油圧弁はポペット弁を使用しこれをフォースモータ等の電磁力で位置制御するため漏れを極小にできる。また、本発明による電気油圧弁では、電磁力をポペットに伝える衝棒とポペットとの間にバランスピストンを配置し、これによって電磁力に対し油圧力が負荷とならないようピストン面積を選定して油圧力の平衡を完全に達成しているのでスプール形式の弁と同等の連続的な制御精度を確保できる。

【0026】以上により、油圧源の容量が小さくでき、さらに極端に油圧源が制限される場合、例えば、停電時に油圧源が停止した後もアキュムレータ内の油圧で作動を続けるような装置の場合も性能を損なうことなく小さい容量のアキュムレータで作動させることができ、スペース、重量上非常に有利になる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の一実施例に係わる電気油圧弁の構造図。

【図2】本発明の電気油圧弁を適用した油圧サーボシリンダの油圧系統図。

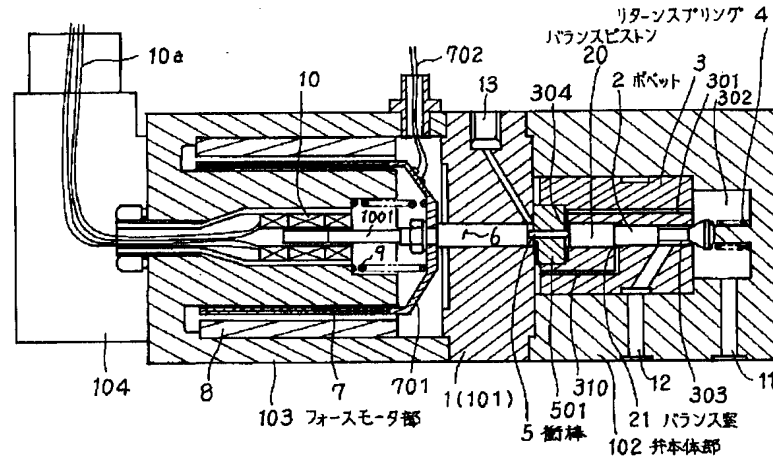
【図3】従来のノズルフラップ型サーボ弁の断面図。

【符号の説明】

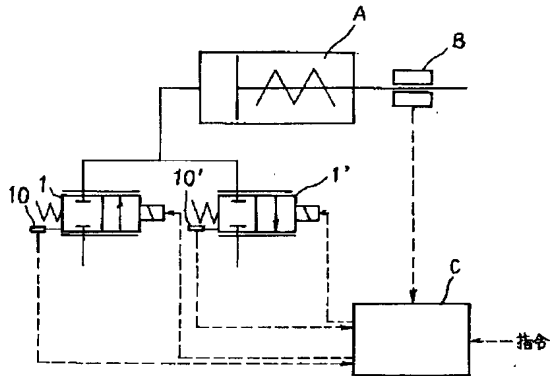
- | | |
|---|-----------|
| 1 | 弁本体 |
| 2 | ポペット |
| 4 | リターンズプリング |

5	衝棒	20	バランスピストン
7	コイル	301	連絡通路
8	磁石	1001	差動変圧器のコア
10	差動変圧器のコイル		

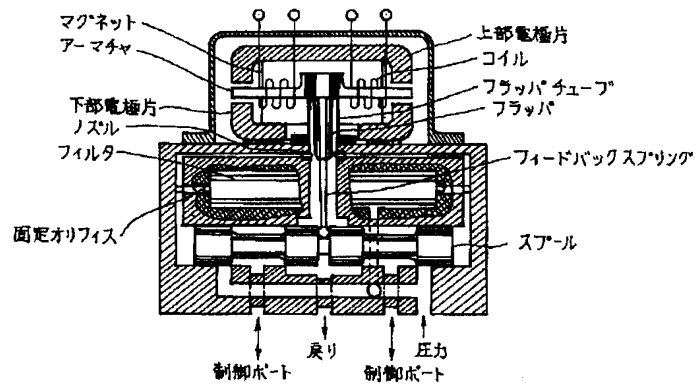
【図1】



【図2】



【図3】



フロントページの続き

(72)発明者 白木原 民也
 広島県三原市糸崎町5007番地 三菱重工業
 株式会社三原製作所内